

VOCALO-CLASSICA OMNIBUS

UK BAROQUE 18th

Special Liner Notes

BRITISH & IRISH
Early Music & Trad



♣ Kapelle Triona ♣
Presents

TRIONA-0001 * (P) 2010 Kapelle Triona *

1. モンテヴェルディ「聖母マリアの夕べの祈り」より 2:17
Vespro della Beata Vergine (UK Remix):trionaP(arr.)
クラウディオ・モンテヴェルディ Claudio Monteverdi 1567-1643
2. グリーンスリープス 3:11
Greensleeves イングランド民謡:さささP(arr.&Lyric)
3. ダンスタブル「聖霊よ、来たりたまえ」 2:45
Veni, Sancte Spiritus:ありほんP・るねさんずP
ジョン・ダンスタブル John Dunstable 1390?-1453
4. タリス「おお、聖なる饗宴よ」 3:30
O sacrum convivium:るねさんずP
トマス・タリス Thomas Tallis 1505?-1585
5. バード「アヴェ・ヴェイルム・コルプス」 3:07
Ave verum corpus:マリAPP
ウィリアム・バード William Byrd 1540?-1623
6. ダウランド「彼女は許さでろうか」 2:31
Can she excuse my wrongs:りーとP
ジョン・ダウランド John Dowland 1563-1626
7. ダウランド「流れよ我が涙」 4:25
Flow my tears:クラヴィアP
8. スカボロー・フェア 2:51
Scarborough Fair イングランド民謡:trionaP(arr.)
9. The Minstrel Boy 3:20
アイルランド民謡:さささP(arr.)
10. サリー・ガーデン 2:12
Down by the Salley Gardens アイルランド民謡:CalmP(arr.)
11. Dublin Jack of All Trades 2:27
アイルランド民謡:さささP(arr.)
12. Nollaig～聖夜(ノーリック) 2:36
(アイルランド古曲 Carolan's Welcome に基づく):trionaP(arr.)
トゥールロホ・オ・カロラン Turlough O'Carolan 1670-1738
13. ウィルビー「おいで、心地よい夜よ」 4:34
Draw On, Sweet Night:聖ルカ学院合唱団
ジョン・ウィルビー John Wilbye 1574-1638
14. 讃美歌「心に愛を」 0:55
Fill us with the Father's love:ふるるP
オーランド・ギボンズ Orlando Gibbons 1583-1625
15. パーセル「ミゼレーシ」 1:09
Miserere mei Z.109:ミゼレーP
ヘンリー・パーセル Henry Purcell 1659-1695
16. パーセル「愛のためにつくられて」 1:08
For Love ev'ry Creature is Form'd:ハツネブルク州立歌劇場の使用人
17. パーセル「神よ、汝こそ我が神」 4:38
O God, Thou Art My God:聖ルカ学院合唱団
18. ヘンデル「主に向かいて歌え」(カンターテ・ド・ミノ) 3:35
Cantate Domino (『マカベウスのユダ』『見よ、勇者の帰れるを』に基づく)
べにしだ(合唱指揮):trionaP(演奏指揮・オーケストレーション)
ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Handel 1685-1759
- ヘンデル:オラトリオ『メサイア』より Oratorio "Messiah"
19. 合唱「ハレルヤ」 3:38
Hallelujah マリアP(合唱指揮):trionaP(演奏指揮)
20. アコンパニヤート「ここで真義を告げよう」 11:54
～マリAPPが響いて～
Behold, I tell you a mystery~The trumpet shall sound
ミクナールP(演奏指揮)・雨ノ音P(歌唱指揮)
21. 合唱(終曲)「屠られし羊こそ～アーメン」 7:06
Worthy is the Lamb - Amen:trionaP

TotalTime 73:55



♣ Kapelle Triona ♣

Presents

<http://triona.bach.bufsiz.jp/>

2010-08-14

TRIONA-0001 © 2010 Kapelle Triona * ① Produced in Japan

※本体ブックレットの誤植訂正
ブックレット4ページ(裏表紙)記載の曲目詳細で、
第15曲と第16曲の順番が逆に記載されていました。
正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。
また、背の英文表記がOmnibusになっていました…
が、気づいたら負けです>>

1. モンテヴェルディ「聖母マリアの夕べの祈り」より

(第1曲 ヴェルシクルム～レスボンソリウム) UK Remix - with Pipe Band

クラウドイオ・モンテヴェルディ Claudio Monteverdi 1567 - 1643

Vespro della Beata Vergine : I. Versiculus - Responsorium

trionaP (arr.) : 既成作の改作 (nm11420536)

(a) ヴェルシクルム (先唱: 独唱)
Deus, in adiutorium meum intende.
神よ、われに救いをもたらしたまえ。

(b) レスボンソリウム (応唱: 合唱)
Domine, ad adjuvandum me festina.
Gloria Patri, et Filio, et Spiritui Sancto.
Sicut erat in principio, et nunc, et semper,
et in saecula saeculorum. Amen.
Alleluja.

主よ、われを急ぎ助けたまえ。
聖父と聖子と聖霊とに栄光あれ
初めにありしごとく、今も、いつも、
世々に至るまで。アーメン
アレルヤ

先唱: 初音ミク

合唱: 初音ミク(Cantus), 鏡音リン(Sextus), 巡音ルカ(Altus),

鏡音レン(Quintus), 氷山キヨテル(Tenor, Bassus)

音律: アーロン中全音律 (ミーントーン基本形) コーアトーン(A466)

編成:

* UK Side: バグパイプ/アイリッシュハーブ/スneaノ

バウロン/ルネサンスフルート(生演奏)

* Baroque Side: ツィンク(ホルネット) I, II / ティンパニノ

サクバット(トロンボーン) I~IV / ヴァイオリン I, II /

ヴィオラ・ダ・ガンバ I, II / セルバン/ヴィオローネノ

通奏低音[テオルボ/リュート/ハーブ]/オルガン(Hauptwerk使用)

はじめまして! このたびコンビ企画の主催を務めさせて
いただきましたtrionaPです。

今回せっかくジャケにとってもかわいいうバグパイプさん
のイラストを描いていただいたので、英国音楽の定番、バ
イブバンドは入れたいなあと思いつ、古楽&アイリッシュ
ユ畑の私にはあいにく守備範囲にスコットランドのバイブ
スマーチはなく・・・

ふと思いつき、バロックの幕開けを告げたモンテヴェルデ
イの記念碑的名曲をバイブバンド風アレンジ、さらにオリ
ジナルの時代である17世紀初頭をイメージした独自ア
レンジによる古楽オケとMIXしてみました。

原曲が元々、合唱と低音がおなじ和音をずーっと引き伸ば
した上に、高音楽器の装飾的な旋律が躍動する形なので、
これをそれぞれバグパイプのドローンとチャンターにすれ
ばびったりだなーと直感的に思ったのでした。

モンテヴェルディは、ルネサンス音楽からバロック音楽へ
の橋渡しをしたと評されるイタリアの大作作曲家ですが、英
国の現代古楽の筆頭として有名な楽団に、「モンテヴェル
ディ合唱団」(カーティナー指揮)と名前が付けられてい
る・・・という微妙なゆかりもあります。

「英国」・「トラッド」を象徴するバイブバンドと、「バロック」
を象徴する古楽オケの両群による競演 (コンチェルト)
コンビの序曲として、アルバムコンセプトを象徴する曲に
できたことと思います。

ホームページ <http://triona.bach.bufsiz.jp/>

■ 投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/7369168>

2. グリーンスリーブス

Greensleeves イングランド民謡：さささP (arr.&Lyric)

歌唱：鏡音レン

既成作の改作 (sm4240263)

Alas, my love, you do me wrong.
To cast me off discourteously.
For I have loved you for so long.
Delighting in your company.

この心を打ち捨て
あなたは遠ざかる
僕の幸せ全てを
切り裂いたまま

美しい調べと歌
耳に運ば
どこにもない瞳
探して森を彷徨う

Greensleeves was all my joy
Greensleeves was my delight.
Greensleeves was my heart of gold.
And who but my lady greensleeves.

春の日に透ける木々の緑色
僕の心の色
あの袖の色

秋の露に濡れる草の緑色
白い腕を隠した
あの袖の色

道ならぬ恋の火は（恋の炎）
今もこの胸に（僕を焦がし）
あなた心はがりは（あなた心は冷たく）
燃やせなくても

風に消え去祈りの
残り香はやらぬき
忘れることもできぬ
あの袖の色

夏の雨が注ぐ山の緑色
いたずらに惹かせろ
あの袖の色

冬の雪に眠る森の緑色
二度と触れることない
僕のlady greensleeves

さささと申します。アイルランド・イギリスの伝統曲
が大好きで、普段はボーカロイドにカバーさせたり、
それっぽい曲を作って歌ってもらったりしています。
今回は素敵なコンセプトのアルバムに参加させていた
だったので、自信のなさを必死で押し隠しつつ解説的
なものを……。

僕のlady greensleeves

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/3312716>

■ Greensleeves

日本でも、言わずと知れた有名なメロディですね。16世紀後半頃に生まれた古い曲なのだから。一番以外は拙訳の日本語歌詞なのですが、超訳というか、相当な拡大解釈をしています。すいません。元々は娼婦を歌った歌だの不倫の歌だの、というアダルトな説の多い歌詞ですが、勝手ながら、失恋の辛さの方を前面に出したかったのです。

3. ダンスタブル「聖霊よ、来たりたまえ」

Veni, Sancte Spiritus

ジョン・ダンスタブル John Dunstable 1390?-1453

ありぼんP・るねさんずP：新作・未発表

SUPERIUS	スーパーリウス	ALTUS	アルトゥス
Veni, Sancte Spiritus. Et emitte caelitus Lucis tuae radium.	聖霊よ、来たりたまえ、 天より 放ちたまえ 御身の光の輝きを。	Veni, Sancte Spiritus. Et infunde primum. Rorem caeli gratiae.	聖霊よ、来たりたまえ、 天の恩寵の露をそそぎたまえ。
Veni, pater pauperum. Veni, dator munerum. Veni, lumen cordium.	貧者の父よ、来たりたまえ、 贈り主よ、来たりたまえ、 心の光よ、来たりたまえ。	Precantibus (peccantes) humanitas. Salve nos divinitus A serpentis facie.	罪ふかき祈禱者を、 天の力にて 誘惑より救いたまえ。
Consolator optime. Dulcis hospes animae. Dulce refrigerium.	最上の慰め主、 魂のよき賓客、 やさしき慰め。	In cuius praesentia Ex tua clementia (Tecta sicut peccata) (pectora).	御身のもとにあれば 御身の慈悲により (心の罪は隠されん。)
In labore requies. In aestu temperies. In fletu solatium.	苦しみにあつては 癒し、 暑きにあつては 冷まし、 嘆きにあつては 慰め。		
O lux beatissima. Reple cordis intima Tuorum fidelium.	おお いと恵まれし光よ、 信ずるものの 心を満たしたまえ。		

中世の時の流れ感じさせてくれるやさしく柔らかな合唱音楽です。

今回、私の担当は「べたうち」まで。ミクが唄ってるなあーくらいのものでした。そこからるねさんずP様に引き継いでいただき、すばらしい完璧な仕上げをお聴きのとおりです。

調律は「はちゅ〜ん」でDにシフトしたキルンベルガー第2にしました。「はちゅ〜ん」はVOCALOID2のトラックのノートを読み取り、指定した調律の値どおりに自動でピッチ付けがされたVSQを生成するツールです。どんな曲でも一瞬で調律替えを実施してくれることから、今日のボカロ古楽の制作に欠かせないものになっています。作者のじゃけ様にはたいへん感謝しています。

(ありぼんP)

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/3175396>

CONTRATENOR

コントラテノール

Veni. Creator Spiritus.
Mentes tuorum visita.
Imple superna gratia.
Quae tu creasti. pectora.

創り主なる聖霊よ、来りたまえ、
しもべらの魂に降りたまえ、
御身の創りたまひし心を、
天の恩寵にて満たしたまえ。

Qui paraclitus diceris.
Donum Dei altissimi.
Fons vivus. ignis. caritas
Et spiritalis unctio.

慰め主と呼ばれるもの、
いと高き神の賜物にして、
浩浩たる泉、火、愛
また 御霊の塗油。

Tu septiformis munere.
Dextrae Dei tu digitus.
Tu rite promissum Patris
Sermone ditans guttura.

七重の賜物、
神の右手の御指、
御父の正しき約束にして
我らに言葉を与えらるもの。

TENOR

テノール

(Veni. Creator Spiritus).
Mentes tuorum visita.
Imple superna gratia.
Quae tu creasti. pectora.)

創り主なる聖霊よ、来りたまえ、
しもべらの魂に降りたまえ、
御身の創りたまひし心を、
(天の恩寵にて満たしたまえ。)

中世のヨーロッパでは、フランスを中心にリズムを重視する多声音楽が発達し、時代とともに技巧的かつ複雑になっていきます。一方、英国では3度・6度の和声を積極的に取り入れた美しい響きを持つ音楽が展開されていました。この和声音楽は英国独特のものであり、大陸の音楽家たちが初めてその響きを耳にしたとき、この音楽を「甘美な響き」と賞して大変に驚いたといわれます。そして、この英国と大陸の音楽の出会いによって、ルネサンス音楽が花開くこととなりました。

英国から大陸へ、この「甘美な響き」を伝えたと思われる音楽家が、ジョン・ダンスタブル（1390頃-1453）です。ダンスタブルは外交官でもあり、彼が英仏百年戦争の休戦時に大陸に渡った際、英国の和声音楽を大陸へともたらし、逆に英国には大陸の最新音楽理論を持ち帰ったとされます。ダンスタブルは英国音楽のみならず、後のルネサンス音楽の出現にも多大な貢献をした音楽家だったわけです。

4声のモテット「来たれ聖霊」は、ダンスタブルの代表作として今日最もよく知られる作品のひとつ。中世の音楽らしい巧妙なリズムに、あの「甘美な響き」が柔らかく美しい彩を加える見事な楽曲です。作品の制作にあたり、ありほんPが選曲、ノート打ち込み、発音調整、音律設定まで行った後にるねさんPが引継ぎ、表情付けとMIXを行って補完しました。なお、今回制作したのは、楽曲の前半部のみであることをご了承ください。

(るねさんP)

Superius, Altus, Tenor, Bassus 初音ミク Append Solid
はちゅへんによりキルンベルガー第2法（Dシフト）に調律

4. タリス「おお、聖なる饗宴よ」

O sacrum convivium

トマス・タリス Thomas Tallis 1505?-1585

るねさんずP：既成作の改作 (nm9925879)

O sacrum convivium,
in quo Christus sumitur,
recolitur memoria passionis ejus,
mens impletur gratia,
et futurae gloriae nobis pignus datur.

おお聖なる饗宴よ
その宴にてキリストが受け取られ
受難の記憶が新たにされる
心は恩寵に満たされ
常しえの栄光の証が我らに与えられる

Superius, Discantus, Altus, Tenor 初音ミク
Bassus 鏡音レン
はちゅへんによりミーントーン（Dシフト）に調律

宗教改革の嵐が吹き荒れたテューダー時代。それは、国王が代わるたびに宗教政策も変わるという激動の時代でした。この時代の英国宮廷に仕える音楽家たちは、国の宗教方針に従った音楽活動を強いられたといえます。

トマス・タリス（1505頃-1585）は、そんな歴史の流れに翻弄されながらも、テューダー朝の4代の国王に仕え、英国の宮廷音楽の発展に多大な貢献をした音楽家。その功績により、女王エリザベス1世から楽譜の独占出版権という栄誉を賜ったほどで、英国音楽史における偉大な作曲家のひとつです。

ラテン語による5声の作品「おお、聖なる饗宴よ」は、キリストの聖体の祝日の第2晩歌のためのアンティフォナです。その使用目的には諸説あり、国教会を推進しながらも個人ではラテン語での礼拝を好んだ女王エリザベス1世のために書かれた、ともいわれます。タリスらしい美しさに満ちた名作のひとつです。

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/15102731>
Twitter: t2_renaissance

5. バード「アヴェ・ヴェルム・コルプス」

Ave verum corpus

ウィリアム・バード William Byrd 1540?-1623

マリアP：新作・未発表

- ・ソプラノ：初音ミク、miki、巡音ルカ
- ・アルト：メグツポイド、鏡音リン、sonika
- ・テノール：鏡音レン、初音ミクsolid、tonio
- ・バス：がくつぱいど、初音ミクdark、BIG-AL

Ave verum Corpus natum
De Maria Virgine:
Vere passum. immolatum
In cruce pro homine:
Cuius latus perforatum
Fluxit aqua et sanguine:
Esto nobis praegustatum
in Mortis examine.
O dulcis!
O pie!
O Jesu Fili Mariae.
Miserere mei. Amen.

めでたし、童貞マリアより生まれ給いし
まことの御体よ、
げに人のために苦しみを受け、
十字架の上にていけにえとなり給いし御者よ、
御脇腹はさし貫かれ、
水と血とを流し給えり。
願わくは臨終の戦いに当りて、
あらかじめわれらに天国の幸いを味わしめ給え。
ああ甘美なる、
慈悲深き、
マリアの御子なるイエズスよ。
われを憐れみたまえ、アーメン。

音律：キルンベルガー第1法 (Es基準) コーアトーン(A466)

女王エリザベス1世の時代、イングランドで活躍した「ブリタニア音楽の父」ウィリアム・バード。彼はイギリス国教会の影響力が拡大する時代にあつて、最期までカトリックの信仰を保ち続けた作曲家でした。

同じカトリック教徒であったトマス・タリスに師事した彼は、数多くの優れた声楽曲を遺しました。王立礼拝堂楽員として、彼がイギリス国教会向けに作曲した声楽曲は、最も優れたイギリス国教会音楽の一つとされています。しかし、バードの声楽曲の最高傑作は、国教会のイギリスにおいてカトリックの信仰を貫いたバードの信念が感じられるラテン語ミサ曲やモテットであるとされています。

その中でも、とりわけ有名な「Ave verum corpus」は、数多くの作曲家が手がけた同じ名前を持つ曲の中でも、モーツァルト等と並んだ有名曲です。アカペラの混声四部合唱が作り出す、崇高なハーモニーにボーカリスト12人で挑戦してみました。

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/3574512>

6. ダウランド「彼女は許すだろうか」

Can she excuse my wrongs

ジョン・ダウランド John Dowland 1563-1626

りーとP：新作・投稿済み (sm11769659)

Can she excuse my wrongs with Virtue's cloak?
Shall I call her good when she proves unkind?
Are those clear fires which vanish into smoke?
Must I praise the leaves where no fruit I find?

No. no: where shadows do for bodies stand.
Thou may'st be abus'd if thy sight be dim.
Cold love is like to words written on sand.
Or to bubbles which on the water swim.

Wilt thou be thus abused still.
Seeing that she will right thee never?
If thou canst not o'ercome her will.
Thy love will be thus fruitless ever.

Was I so base that I might not aspire
Unto those high joys which she holds from me?
As they are high, so high is my desire:
If she this deny, what can granted be?

If she will yield to that which reason is.
It is reason's will that love should be just.
Dear, make me happy still by granting this.
Or cut off delays if that I die must.

Better a thousand times to die
Than for to love thus still tormented.
Dear, but remember it was I
Who for thy sake did die contented.

彼女は僕の苦しみに、どう言い訳出来るのだろうか？
彼女が冷たい人だとわかってても、僕は彼女に好きだと言えるのか？
それは煙のように消え去ってしまう、美しい炎？
僕は果実のならない樹を賛美しなければいけないのか？

いや違う。恋愛とは、影法師まえもどこにあるのかわからない場所
薄暗くて、眼なんてアテにならないんだ
冷たい愛なんて、砂に書かれた言葉が
水を泳ぐ泡のようなもの

まだ彼女を見つめる僕の乾いた眼よ、
彼女が僕を見てくれない事は見えているのか？
彼女の心に打ち勝たなければ
愛の果実は実らないというのに

僕は自分勝手な男だったのが、それなら望みも持たなかったのに
彼女は僕に、大きな喜びを抱いていなかったのか？
彼女の喜びが大きいほど、それが僕の願いとなったのに
彼女がそれを否定するなら、僕の何を叶えてくれると言うんだ？

もし彼女が、僕のために何かしてくれるのなら
愛すること。ただそれだけで構わない
ああ、僕の幸せな願いを叶えてくれ
それが出来ないのに君がまだここにいるなら、僕は死ぬしかないんだ

いや、愛するために苦しむよりは
何千回でも死んでしまうほうがよっぽど良い
ああ、でも忘れないでくれ
僕は君のために、満ち足りた心で死んでいくんだ

約400年前のイギリス人作曲家、ジョン・ダウランドの作品になります。

この人は、「リュート」という当時は一般的だった弦楽器を用いて曲を作り、その歌を自分で歌って収入を得ていました。

そういったスタイルと、ほぼ全ての作品で愛や悲しみなどの、いわゆる世俗的な曲を作り続けた事から、世界で初めてのシンガーソングライターとも言われるようです。

宗教から離れて音楽に没頭し、なおかつ収入を得る人は、当時としては極めてまれだったためですね。

この曲も恋愛を歌うもので、振り向いてくれない女性を想う男性の悲哀が独特なリズムで歌われていきます。

ちなみにこの曲は1597年に出版された歌曲集の1曲で、作詞者はエリザベス1世から寵愛を受けたことで知られるエッセックス伯爵だと言われています。

訳は私自身がしていますが、古い英語だったので非常に難しく、間違っているところ、意味の取れないところがあるかと思います。ご容赦いただければ幸いです。

歌はVOCALOIDのKAITOに、カウンターテナーという形で歌ってもらっています。

まだリュート伴奏もDTM上で行わせています。

ですが歌自体の調整、英語、リュートの音など、難しい面が多く、満足されない方が多いかもしれません。

精一杯やりましたが、この辺が私の力量という事で、これもご容赦いただければ、と思います。

ともあれ、多くのP様が参加しているこのボカロクラシカ・コンピレーションCDに、私自身も加わる事が出来て、本当に嬉しく思います。

機会を作ってくくださったtrionaP様、ありがとうございました。

そして何より、このCDを手にとってくださった皆さまに感謝致します。

VOCALOIDによるクラシック音楽という、きわめてニッチな世界ですが、「それもアリかな」という感じで、気軽に楽しんでもらえれば、制作側としても嬉しい限りです。

そして、ここに集まった曲達を聴いて何か心に残るものがあれば、これにまさる喜びはありません…。

(りーとP)

7. ダウランド「流れよ我が涙」

Flow my tears

クラヴィアP：新作・投稿済み (sm11206325)

Flow my tears fall from your springs,
Exiled for ever let me mourn:
Where night's black bird her sad infamy sings,
There let me live forlorn.

Down vain lights shine you no more.
No nights are dark enough for those,
that in despair their last fortunes deplore.
light doth but shame disclose.

Never may my woes be relieved,
since pity is fled,
and tears, and sighs, and groans my weary days,
of all joys have deprived.

From the highest spire of contentment,
my fortune is thrown,
and fear, and grief, and pain for my deserts,
are my hopes since hope is gone.

Hark you shadows that in darkness dwell,
learn to condemn light,
Happy, happy they that in hell,
Feel not the world's despite.

流れよ、我が涙、泉より落ちて
永遠に追われて私を嘆かしめよ
夜の黒い鳥が、悲しき辱めを歌うこの場所で
私をわびしくながらわしめよ

消えよ、むなしき光、もう輝くな
どんな夜でも暗すぎはしない
絶望の中、過ぎ去りし幸運を嘆く者にとって
光はただ恥辱をあらわにするものにすぎないのだから

この苦惱は決して消えはしないだろう
憐れみは失われたのだから
せして、涙と、ため息と、呻きに満ちた憂鬱な日々
あらゆる喜びを奪われているのだから

満ち足りた幸福の絶頂から
幸運はどこかへ逃げて行った
せして、恐れと、嘆きと、苦痛が不毛な日々にとっての希望となった
あらゆる希望が失われてからは

聞け、闇に染くう影たちよ、
光を責め詰るがよい
幸いなるかな、地獄にある者たちよ
この世での屈辱をものはや感ることのあらゆるれば

ダウランドは以前から親しみを感じていた作曲家だったので、この企画を知ったとき、ダウランドの作品で参加してみたい、と思いました。リユート独奏曲をアカペラで歌うことも考えてみましたが、それより歌曲のほうがよいと思い、最も有名なこの曲を選びました。ダウランドの曲はシンプルで味わい深く、ルカさんともに取り組むことはとても興味深い体験となりました。ダウランドの歌曲はたくさんあるので、また挑戦してみたいと思っています。

歌唱：巡音ルカ

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/3963683>

8. スカボロー・フェア

Scarborough Fair - イングランド民謡

trionaP (arr.) : 新作・未発表

Are you going to Scarborough Fair?
Parsley, sage, rosemary and thyme.
Remember me to one who lives there.
She once was a true love of mine.

Love imposes impossible tasks.

Parsley, sage, rosemary and thyme.
Though not more than any heart asks.

And I must know she's a true love of mine.

Dear, when thou has finished thy task.

Parsley, sage, rosemary and thyme.

Come to me, my hand for to ask.

For thou then art a true love of mine.

If you say that you can't, then I shall reply.

Parsley, sage, rosemary and thyme.

Oh, let me know that at least you will try.

Or you'll never be a true love of mine.

Are you going to Scarborough Fair?

Parsley, sage, rosemary and thyme.

Remember me to one who lives there.

For she once was a true love of mine.

歌唱：巡音ルカ

音律：アーロン中全音律（ミーントーン基本形）

モダンピッチ（A440） 短調

スカーパーラの市へ行くのかい？
パセリ、セージ、ローズマリーにタイム
そこの住む娘によろしく伝えてくれないうが
かつて僕の恋人だった娘なんだ。

愛とは無茶な仕事を強いるもの
パセリ、セージ、ローズマリーにタイム
けれど、心の求めに勝るものはない
彼女こそ真の恋人だと銘ずるべきなのだ。

一愛しい人よ、君が仕事を終え去らな
パセリ、セージ、ローズマリーにタイム
僕のもとへ来て この手を求めなさい
その時こそ君はわが真の恋人一

それが叶わぬと云ふのなり、こう答えよう
パセリ、セージ、ローズマリーにタイム
ああ、せめて努めてみると知らせしてくれ
でなければ貴女は真の恋人ではない。

スカーパーラの市へ行くのかい？
パセリ、セージ、ローズマリーにタイム
そこの住む娘によろしく伝えてくれないうが
かつて僕の恋人だった娘に。

「サイモン&ガーファンクル」によるカバーで非常に有名な曲ですが、起源を辿れば「エルフィンナイト」（妖精の騎士）というスコットランドのバラッドに由来し、イングランドでは詞を変えて17世紀頃から歌い継がれる歴史ある民謡です。今回、基本のメロディラインはサイモン&ガーファンクル版を元にしたますが、原曲となった当時の民謡を想像して古楽風にアレンジを加えてみました。とはいってもあくまで独自編曲で、本来の原曲は今となっては不詳です。民間で伝承されてきた曲のため、歌詞も旋律すらも、いくつものバリエーションがあるようです。スカーパーラ（スカーパーロウは米国読み）はイングランド東岸の港町で、定期市（Fair）には各地から人が集まる交易地でした。元の詞は、恋人の心を引くためお互い無理難題を出し合うという少々冗談めいた内容ですが、今回の歌詞は、その中から気に入った節を独自解釈でセレクトしました。抽象的で意味深に思われた部分を集めてきたので、こうして並べるとまた違う味わいがあるかも知れません。

編成：リュート、ルネサンスフルート、中世フィドル、ヴィオラ・ダ・ガンバ、ヴィオローネ、パウロン

9. The Minstrel Boy

アイルランド民謡

歌唱：MIRIAM

さささP (arr.) : 既成作 (sm11241184)

The Minstrel Boy to the war is gone
In the ranks of death you will find him:
His father's sword he hath girded on,
And his wild harp slung behind him:

"Land of Song!" said the warrior bard,
"Tho' all the world betrays thee,
One sword, at least, thy rights shall guard.
One faithful harp shall praise thee!"

The Minstrel fell! But the foe man's chain
Could not bring that proud soul under:
The harp he lov'd ne'er spoke again,
For he tore its chords asunder:

And said "No chains shall sully thee,
Thou soul of love and brav'ry!
Thy songs were made for the pure and free,
They shall never sound in slavery!"

"Thy songs were made for the pure and free,
They shall never sound in slavery!"

曲はアイルランドの古くからの伝統曲ですが、歌詞はイギリスからの独立運動が盛んだった頃に国民的詩人、Thomas Mooreによって作られたもので、アイルランドの象徴であるハーブは、たとえ命が尽きてでも敵国の手には決して渡さない、という悲壮な決意に満ちたものです。今回trionaさんに「こんな歌詞ですけどコンセプト的にはOKなんでしょうか……」と伺ったところ、全く問題ないですよ、とのお返事にほっとしました。アルバム中でここだけ英愛関係最悪っぽいんですが、私は両国とも大好きです。

(triona註) 英国は、ケルト人、ローマン、アングロサクソン人、デー人、フレンチ・ノルマン人など色々な民族の混成の歴史で成り立ちましたが、ことに対岸のアイルランドがイングランドに支配された歴史は、未だにわかかりが消えません。黄金の大英帝国史の影には、そんな哀しい負の歴史もあることを、この曲は切々と伝えてくれます。

詩人の少年は、戦に行ってしまっただけ
自らの死に向かって
腰には父の剣 背には粗末なハーブ

「歌声の国よ」戦士にして詩人は言った
「世の全てがお前を裏切ろうとも、
その剣はお前を守り、
その忠実なるハーブがお前を讃えるだろう」

※繰り返し

詩人は倒れたが、敵の鎖は
気高きその魂までは奪えなかった
愛したハーブは二度と鳴ることはない
彼が弦を切り裂いてしまったから

そして言った
「どんな鎖も、傷つけることはできない、
お前の愛と勇気に満ちた魂を。
お前の歌はけがれ無き心と自由の力のもの。
膚の身を奏ひることは決してないだろう」

10. サリー・ガーデン

Down by the Salley Gardens

アイルランド民謡 (W.B. イェイツ・詞)
Irish Trad.

Lyric: reconstructed by W. B. Yeats

Music: Irish Trad. "The Maids of Mourne Shore" (An Traigh Mughdhorna)

CalMP (arr.) : 既成作 (sm10959923)

Down by the salley gardens my love and I did meet;
She passed the salley gardens with little snow-white feet.
She bid me take love easy, as the leaves grow on the tree;
But I, being young and foolish, with her would not agree.

In a field by the river my love and I did stand.
And on my leaning shoulder she laid her snow-white hand.
She bid me take life easy, as the grass grows on the weirs;
But I was young and foolish, and now am full of tears.

柳の園の近くで 僕は愛する人と逢った
彼女は柳の庭を抜けて行った 白雪のような足で
彼女は僕にこう言った
恋は気楽に そう 木に葉が残るみたい
でも僕は若くて愚かだったから 彼女の言葉を受け入れられなかった

川のほとりの野原の中 愛する人と立っていた
そして彼女は僕の肩に 彼女の白雪のような手をかけた
彼女は僕にこう言った
人生は気楽に そう 壇に草が残るみたい
でも僕は若くて愚かだったから 今は涙であふれている

歌唱：巡音ルカ
オケ音源：D-pro LE, VITA

アイルランドの詩人W. B. Yeatsがスライゴーの村の老婆が歌う古い詩(うた)の断片をもとにして再構成した有名なトラッド。その Yeatsが元とした詩は"The Rambling Boys of Pleasure"という18世紀のパラッドだということが研究で明らかになっていきます (O'Boyle 1976)。また、歌詞に出くる "salley"は柳(やなぎ)、という意味です。また、この歌詞に乗せてあるメロディは"The Maids of Mourne Shore" (An Traigh Mughdhorna)という airです。この曲の印刷物としての初出は、初めての大規模なアイルランドの民族音楽収集作業となった「陸地測量 Irish Ordnance Survey」の際の1834年の Derry(Londonderry)での採譜版 (George Petrie 編集のCollection of the Ancient Music of Ireland, 1855収録) なのですが、18世紀生まれの元ネタ "The Rambling Boys of Pleasure"が今でもこの曲と歌詞のvariantとして歌われることを考えれば、このメロディも同様に歴史のあるものだと思います。この曲が正式に(?) 現在よく知られている形になったのは、Yeatsの友人でもあるHerbert Hughesが1906年にこの歌詞と曲を合わせてから。素朴でせつない、そんな素敵な、うた。そのうたを、少しでも響かせることができたら素敵だな、と思います。

11. Dublin Jack of All Trades

アイルランド民謡

さささP (arr.) : 既成作 (sm9362695)

Big-AL (メイン歌唱) MIRIAM (コーラス)

巡音ルカ、鏡音リン・レン (繰り返し部分のみコーラス)

Oh, I am a roving sporting blade,
they call me Jack of all trades
I always place my chief delight
in courtin' pretty fair maids

So when in Dublin I arrived
to try for a situation
I always heard them say it was
the pride of all the nation

※I'm a roving Jack of many a trade
Of every trade, of all trades
And if you wish to know my name
They call me Jack of all trades

On George's Quay I first began
and there became a porter
But me and my master soon fell out
which cut my acquaintance shorter

In Sackville Street was a pastry cook;
In James' Street, a baker
In Cook Street I did coffins make;
In Eustace Street, a preacher.

※繰り返し

In Baggot street I drove a cab
and there was well respected
In Francis Street had lodgin' beds,
to entertain all strangers

For Dublin is of high reknow'n,
or I am much mistaken
In Kevin Street, I do declare,
sold butter, eggs and bacon.

※繰り返し

In Golden Lane I sold old shoes:
In Meath Street was a grinder
In Barrack Street I lost my wife,
I'm glad I ne'er could find her.

In Mary's Lane, I've dyed old clothes,
of which I've often boasted
And later in Exchequer Street,
sold mutton ready roasted.

※繰り返し×2

これもアイルランドの伝統曲で、とても楽しいメロディです。ノリノリになってください。私はThe Chieftainsのアルバムで知ったのですが、どうも詳細な情報があまり見つからず、いつ頃どうやって生まれた曲なのかまったくわかりませんでした。歌詞も色々バージョンがあったり(そもそも上記のThe Chieftainsのものは" Jack of All Trades" とタイトルも違う)するのですが、基本的にはダブリンのあちこちの通りで職を転々とする大道商人の歌です。" Jack of All Trades" は日本語だと「何でも屋」「器用貧乏」という意味だそうで、この歌の主人公もまああんまり儲かってはいなさそうなのですが、色々苦勞をしながらも明るくたくましく生きている庶民パワーが感じられるいい曲です！

12. Nollaig～聖夜(ノーリク)

アイルランド古曲"Carolans' Welcome"(Fáilte Cearbhallaín)に基づく独自編曲

原曲: トゥールロホ・オ・カロラン(ターロック・オキャロラン)

Toirdhealbhadh Ó Cearbhallaín (Turlough O'Carolan) 1670-1738

trionaP(arr.): 既成作(nm9073613)

a. Gaelic Carol "Nollaig～聖夜" 歌唱編曲

Nollaig, Óiche Mhíe Dé Nollaig Shona Oibhí!

聖夜、神の子の夜
聖夜に祝福あれ

(a) Agnus Dei
独自作曲

AGNUS DEI
～神の仔羊よ～

b. カロラン定旋律による四声合唱 独自作曲

Qui tollis peccata mundi,
Misere nobis.

Qui tollis peccata mundi,
Dona nobis pacem.

世の罪を除きたまう主よ
われらを憐れみたまえ
世の罪を除きたまう主よ
われらに平和を与えたまえ

18世紀アイルランドの吟遊詩人カロランの遺したハーブ曲に基づくオリジナルです。カロランの曲は、民衆の間で伝承されて様々な楽器でアレンジされ、今でもアイリッシュ・トラッドの古典として広く親しまれています。前半は、原曲を一般的なアイリッシュ・トラッドの楽器でアレンジしたものと、それに加えてアイルランドのネイティブ言語であるゲール語でクリスマス・キャロル風の歌を付けた編曲です。

編成: アイリッシュ・フルート/アイリッシュ・ハーブ/アイリッシュ・ブザーキ/ヴィオラ・ダ・ガンバ/イーリアン・バイブス/ベル/パウロン
歌: 巡音ルカ、(合唱) 氷山キヨテル
音律: ピュタグラス音律(基本形の全音上にシフト) ピッチ: A440
ベルの音は、チベットの仏具「ティンシャ」(生音)だったりします。

後半ではメロディの大枠を「定旋律」としてびみょーに引用して、ミサ通常文の最終節「アグヌス・デイ」の詞でコラル風の合唱と古楽伴奏に仕立てたパロディ(ほぼオリジナル)です。カロランの旋律をイングランドのバードあたりがカヴァーしたという設定で(実際には時代が逆ですが)、ルネサンス聖楽風に仕立ててみました。世俗的な民謡や流行歌の旋律を「定旋律」として宗教音楽に取り込むパロディ技法は、ルネサンスやバロックの時代では定番でした。

編成: ポジティブオルガン/テオルポ/アルトリコーダー I, II/中世フィドル

音律: アロンのミーントーン ピッチ: カンマートーンA415

カロランはちょうどパーセルとヘンデルの間の世代にあたり、西欧では時あたかも華やかかりしバロック時代盛期。今回の(乗合馬車)の両輪である「古楽」と「トラッド」、そしてイングランドとアイルランドの橋渡しをする車輪的な曲になったかと思えます。ツアーはこれを境にトラッドのターンから17-18世紀古楽のターンへと帰ります。引き続きお楽しみ下さい。

13. ウィルビー「おいで、心地よい夜よ」

Draw On, Sweet Night

ジョン・ウィルビー John Wilbye 1574-1638

聖ルカ学院合唱団：新作・未発表

Draw on, Sweet Night, best friend unto those cares
That do arise from painful melancholy.
My life so ill through want of comfort fares,
that unto thee I consecrate it wholly.
Sweet Night, draw on
My griefs when they be told to shades
and darkness find some ease from paining.
And while thou all in silence dost enfold,
I then shall have best time for my complaining.

来ておくれ、心地よい夜よ、
痛ましい憂鬱からわきあがる悩みの最良の友よ。
慰めの無さにひとく病んでしまった私の命、
それをお前に丸ごと捧げよう。
優しい夜よ、来ておくれ。
影と闇とに打ち明ければ
私の嘆きもいくらか休まる。
お前が静寂の中にすべてを包み抱く頃、
それが私のがこつにふさわしい時。

歌唱：巡音ルカ(全パート)、アカペラ

はちゅ〜んによる調律(キルンベルガー第3法)

はじめましての方ははじめまして。すべての方にこんにちは。主にニコニコ動画で活動しておりますCloudiaと申します。巡音さんに聖ルカ学院合唱団と名づけて合唱曲に色々取り組んでいます。

このたび取り上げたのはジョン・ウィルビー。マドリガル(多声による世俗楽曲)の大家です。高名なダウランドよりわずかに年下で、彼の歌曲集の校正に関わったりもしています。

"Draw On, Sweet Night"は1608年刊のマドリガル第二集に収められた1曲。詩に寄り添った穏やかな長調・悩める短調の対比がすばらしい作品です。

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/13346941>

Twitter: Cloudia_v

14. 讃美歌「心に愛を」

Fill us with the Father's love

作曲者：オーランド・ギボンズ Orlando Gibbons 1583-1625

作詞者：チャールズ・ウエスレー Charles Wesley 1707-1788

心るるP：新作・未発表

Fill us with the Fathers love
Never from our souls remove
Dwell in us and we shall be
Thine through all eternity.

心に愛を 豊かに満たし、
日ごとのわざに つかわしたまえ。

(讃美歌21 88番の歌詞)

ソプラノ：巡音ルカ
アルト：巡音ルカ
テナー：氷山キヨテル
バス：氷山キヨテル
調律：ミーントーン

オルガン：St.Stephen's Anglican Church (Hauptwerk Free版)

SWELL：OBOE 8FT. OCTAVE 4FT. GEDACKT 8FT

GREAT：FIFTEENTH 2FT. FLUTE 4FT. PRINCIPAL 4FT. DULCIANA 8FT. OPEN DIAPASON 8FT

PEDAL：PD. VIOLON 16FT.

COUPLER：GREAT TO PEDAL

オルガン調律：オルガンのオリジナル

作曲家のOrlando Gibbons は音楽家の家に生まれ、21歳のとき、王室礼拝堂オルガニストになりました。ウエストミンスター聖堂のオルガニストも兼ね、バード、ブルとともにイギリスルネサンスの3大オルガニストと呼ばれています。

歌詞はイギリス讃美歌作者として名高いC.ウエスレーが作った詩の1節です。

讃美歌の自作動画はこちらから視聴できます。

<http://www.nicovideo.jp/mylist/12352005>

ツイッターにはfrkw2004のIDでつぶやいています。

ルカやキヨテルに歌わせたい讃美歌があればリクエスト受け付けてます。

15. パーセル「ミゼレーレ」

Miserere mei Z.109

ヘンリー・パーセル Henry Purcell 1659-1695

ミゼレP : 既成作の改作 (nm10589140)

Miserere mei,

O Jesu

Miserere mei

私を憐れんてくださいませ

ああ、イエス様

どうか私を憐れんてくださいませ

イギリス最大の作曲家ともいわれるHenry Purcell(1659-95)の「主よ、我を憐れみたまえ」です。

この安らかな美しい響きの小曲は「ミゼレ」をP名に頂いている私としてはもっとも魅力的で手がけてみたい1曲となりました。

マイナーな作品であるため、国内で楽譜を求めるも見つからず、最終的にはパリから楽譜を取り寄せるという苦労もまた、楽しいものでした。

参加VOCALOIDは次のとおりです。

☆ソプラノ:PRIMA,初音ミク,GUMI,巡音ルカ

☆アルト :PRIMA,初音ミク,GUMI,巡音ルカ,鏡音レン

☆テノール:KAITO,神威がくぼ,巡音ルカ,鏡音レン,鏡音レンact2

☆バス :KAITO,神威がくぼ,GUMI,鏡音レン,鏡音レンact2

ニコニコ動画にも公開(nm10589140)しておりますが、オムニバスCD収録の音源は特別に古典調律(キルンベルガーII)を施しております。

平均律にはない清浄な調べをお楽しみください。

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/4730309>

16. パーセル「愛のためにつくられて」

For Love ev'ry Creature is Form'd

ヘンリー・パーセル Henry Purcell 1659-1695

ハツネンブルク州立歌劇場の使用人：既成作 (sm9256357)

For love ev'ry creature is form'd by his nature
No joys are above the pleasures of love.

すべてのものは、愛のためにつくられ、
愛の愉悦に勝る喜びはなく。

ソプラノ・パート 巡音ルカ (英語DB)

バス・パート LOLA

ジョン・ドライデンのリブレット、ヘンリー・パーセル (1659 (?) - 1695) 作曲の五幕からなるセミ・オペラ『アーサー王、あるいは英国の守護者 King Arthur or, The British Worthy (Z. 628)』(1691年初演)の第四幕のソプラノ・バス二重唱からの一曲。この曲は、後に、パーセルの死後に編纂された歌曲集『イギリスのオルペウス Orpheus Britannicus』第一巻(1698年)に独立した一曲として収録されるが、元の『アーサー王』では、この後にコーラスが続いている。ソプラノ・パート担当は巡音ルカ(英語DB)、バス・パートはLOLA(LEONではありません)。じゃけさん(出遅れP)による「はちゅへん」および「みどちゅへん」でアaronの中全音律に調律。

■投稿作品 <http://www.nicovideo.jp/mylist/4872843>

17. パーセル「神よ、汝こそ我が神」

O God, Thou Art My God

聖ルカ学院合唱団：既成作（sm8577501）

O God, Thou art my God:
early will I seek Thee.

My soul thirsteth for Thee, my flesh also longeth after Thee
in a barren and dry land where no water is.

Thus have I looked for Thee in holiness,
that I might behold Thy power and glory.

For Thy loving kindness is better than life itself.
My lips shall praise Thee.

As long as I live will I magnify Thee on this manner:
And lift up my hands in Thy name.

because Thou hast been my helper,
therefore under the shadow of Thy wings will I rejoice.

Hallelujah.

(Psalms 68:1-5, 8)

神よ、あなたをわたしの神、
わたしは切にあなたをたずね求めます。

わが魂はあなたに渴き、わが肉体はあなたを慕いこがれる、
水なき荒れ果てた野にあって。

その故に私は聖所において目をあなたに注いだ、
あなたの力と栄光とを見ようよ。

あなたのいつくしみは、いのちにもまさるやえ、
我がくちびるはあなたをほめたえ。

わたしは生きながらえる間、あなたをほめ、
手をあげて、み名を呼びまつる。

あなたはわたしの助けとなりたえ、
わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。

ハレルヤ。

(詩篇 68:1~5, 8)

巡音ルカ(全パート)、SD-20(オルガン)

はちゆへん及びscaletunelによる調律(ミーントーン)

UK-Baroqueといえばこの人とも言うべき作曲家、ヘンリー・パーセルは世俗・宗教いずれにも名曲を残していますが、このアンセムは私のお気に入りです。ヴァース・アンセムと呼ばれる形（復合唱ないし合唱隊+アンサンブル、大抵器楽伴奏がつく）で書かれ、耳にすっと入ってくる簡素かつ高潔な構成と、暖かなハレルヤ唱が印象に残ります。もっときびきびした演奏も多いのですが、私の好みでややゆったりしたテンポを取っています。

18. ヘンデル「主に向かい歌え」(カンターテ・ドミノ)

Cantate Domino (オラトリオ『マカベウスのユダ』より「見よ、勇者の帰れるを」に基づく)

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel (George Frideric Handel) 1685-1759

ベにしだ(合唱指揮)・trionaP(演奏指揮・オーケストレーション)：新作・未発表

Cantate Domino canticum novum.
Cantate omnis terra.
alleluia!

Jubilate Deo omnis terra.
cantate et exsultate et psallite.

Benedicite gentes Deum nostrum.
date gloriam laudi ejus.

主に向かい新しき歌え、
全ての地よ、主に向かい歌え、
アレレヤ！(詩編96)

全ての地よ、主に向かい喜びの叫びをあげよ。
歓呼し、喜び歌い、ほめ歌え。(詩編98)

諸々の国の民びとよ、我らの主を祝福し、
栄光に讃美を添えるのだ。(詩編66)

混声4部の部分 sop レン, alt リンact2,
ten KAITO, bass がくぼ
女声3部の部分 sop1 ミク, sop2 リンact2,
alt レンact2
女声2部の部分 sop1 リンact2, sop2 ルカjap
音律:シュニットガーのミーントーン
ピッチ:カンマートーン(A415)

もう10年以上前の話。日本合唱指揮者協会主催の「教会暦による演奏会シリーズ/聖霊降臨祭」なるものに某合唱団のメンバーとして出たとき、最後の出演合唱団による全体合唱で歌った曲です。楽譜もらったとき何じゃらほいと思いましたが、歌ってみましたアノ曲でした。

いわゆる「表彰式の曲」としてよく知られている、ヘンデルのオラトリオ「マカベウスのユダ」の合唱曲「見よ、勝ち誇れる英雄を」に、旧約聖書の詩編「主に向かい新しき歌え」という言葉をあてた曲で、演奏会のパンフの解説によると、一部のキリスト教会でしばしば歌われているもの、らしいです。誰がいつ、こんなアレンジをしたのか、パンフレットの解説は語っていません。手元にあるのはヴォーカル・ソウアのみ、しかも伴奏パートすらなし。もう随分昔のことなので、どんな風に演奏したのかもよく憶えていません。こんな正体不明の曲ですが、このたびtrionaさんによる見事なオリジナルの古楽オケが付き、皆さんの耳にお届けできる運びとなりました。感謝し奉ります。あの有名な珍しい歌詞差し替えヴァージョン、お楽しみください。(ベにしだ)

今回、伴奏のオーケストレーションと打ち込み、そしてMIX作業を、trionaが担当させて頂きました。2009年はヘンデルの記念イヤーということで、ベにしださんとコラボのお約束をさせていただいたものの、誰もが知っている曲であり、構造がシンプルなため、実際取りかかってみると意外に難しく…本アルバムに合わせてようやく完成することができました>>>
古楽らしい響きを表現しましたが、原曲再現ではなく自由な編曲です。むしろ17世紀的な楽器も取り入れ、ヘンデルにしては古風な編成に仕上げました。歌詞と伴奏、二風変わった異色の「アノ曲」をお聴き下さい。(trionaP)

編成:(独自オーケストレーション)

ヴァイオリンⅠ,Ⅱ/ヴィオラ・ダ・ガンバⅠ~Ⅲ/リコーダー(S,A)/
トランペットⅠ,Ⅱ/サクソバッド(トロンボーン)Ⅰ,Ⅱ/
ティンパニ(G-D)/テオルボ/ヴィオローネ/ファゴット/
オルガン(Virtual Pipe Organ "Hauptwerk":Oosterwaartwerd)

19. 合唱「ハレルヤ」

オラトリオ「メサイア」より：ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル

Oratorio "Messiah": 44 Chorus "Hallelujah"

マリアP (合唱指揮) ・ trionaP (演奏指揮) : 既成作 (sm10338354)

Hallelujah! for the Lord God omnipotent reigneth.

The kingdom of this world is become

the Kingdom of our Lord and of His Christ:

And He shall reign for ever and ever.

King of Kings, and Lord of Lords.

ハレルヤ！ 全能の神が君臨しますように

この世の国々は

我らの主とその子キリストの王国となる

彼は永遠に、絶え間なく君臨するだろう

王の中の王、主の中の主。

ごきげんよう、マリアPです。

trionaPさんと、ヘンデル「メサイア」よりハレルヤをコラボさせていただきました。

trionaPさんによる古楽オケに、聖マリア大聖堂聖歌隊の9人で4声コーラスを添えています。

ヘンデル記念イヤーということもあり、2人で気合入れて作りましたが、よい形になったと思います。

どうもありがとうございました。また、このような素晴らしい機会があれば幸いです。(マリアP)

trionaPです。ここから3曲は、バロック音楽の最後を飾った巨匠ヘンデルの晩年の大作オラトリオ『メサイア』より、クライマックスにあたる復活と福音の場面をお届けします。

ヘンデルは、ドイツ・バロックを代表する巨匠としてあまりに有名なJ.S.バッハと同じ年(しかも1ヵ月違い)のドイツ人ですが、20代でイギリスに帰化し、時あたかも彼と前後してドイツの一領邦ハノーファーから招かれ英国王となったジョージ1世のもとで成功を収めたという、数奇な経歴の持ち主。このメサイアは、アイルランドの吟遊詩人カロランの没後4年にあたる1742年にアイルランドの首都ダブリンで初演されたという縁もあります。2つの島国、華やかなロンドンの劇場・宮廷と、アイルランドの地方領主の下という正反対の世界を生きた2人の名匠は、お互いの活躍を知るや知らずや…

このメサイアの中でもひととき有名な「ハレルヤ」コーラスを、ヘンデル没後250年を記念してマリアPさんと合作させていただきました。演奏はバリオド奏法を意識し、いわゆる古楽らしい雰囲気をも再現してみました。聞きなじんだ曲かと思いますが、一般的に演奏される機会の多いモダンオーケストラとは一味違った、18世紀当時に近い響きをお聴き下さい。(trionaP)

合唱：初音ミク、巡音ルカ、miki(以上Soprano)

鏡音リン、メグツボイド、sonika(以上Alto)

鏡音レン、がくっぽいど、BIG-AL(以上Tenor, Bass)

音律：ラモーン全音律(D基準)/ビッチ：カンマートーン (A415)

編成：オーボエ(ユニゾン)/ヴァイオリンⅠ、Ⅱ/

ヴィオラ/トランペットⅠ、Ⅱ/ティンパニ/

通奏低音[チェロ/ファゴット/ヴィオローネ/

ポジティブオルガン/チェンバロ]

20. アコンパニヤート「ごごひ奥義を告げよう」～アリア「ラッパが響いて」

オラトリオ「メサイア」より：ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル

Oratorio "Messiah": Behold, I tell you a mystery~The trumpet shall sound

ミクナルP（演奏指揮）・雨ノ音P（歌唱指揮）

既成作の改作（sm9235434）

Behold, I tell you a mystery:

We shall not all sleep, but we shall all be changed.

In a moment, in the twinkling of an eye at the last trumpet:

ごごひ、あなたちが先に奥義を告げよう。

わたしたちすべては、眠り続けるのではない。

終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。

the trumpet shall sound, and the dead shall be raised incorruptible,
and we shall be changed.

For this corruptible must put on incorruption,
and this mortal must put on immortality.

というのは、ラッパが響いて、死人は朽ちない者によりみがえりされ、

わたしたちは変えられるのである。

なせなら、この朽ちるものは必ず朽ちないものを着、

この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである。

※対訳：日本聖書協会「聖書 口語訳」より

歌唱：KAITO(エンジン1.0)

オケ音源：IK MULTIMEDIA Miroslav Philharmonik

ミクナルPのマイリストmylist/12883359

ブログ「机上管弦楽で たりらら。。。」<http://kijyou-kanngerengaku.blogspot.com/>

ポカロとオケ音源を混ぜてポカロクラシカにて主に器楽曲を作ったりしています。

ポカロクラシカとして、いかがなものか。。。

雨ノ音Pのマイリストmylist/8539619

ブログ「今日も感謝」<http://happy.ap.teacup.com/sunshine/>

ふだんは、ひとりっ子のKAITOに、シューベルトなどのドイツ歌曲を中心に歌ってもらってます。

ヘンデルのオラトリオ「メサイア」の第三部に登場するバスのアリアで、全曲中でも有名なもののひとつです。今回は、1曲前のレチタティーヴォから演奏しています。

歌詞は新約聖書「コリント人への第一の手紙」からとられており、「最後の審判」のときに死者が墓からよみがえる場面を語っています。トランペットソロは「終末のラッパ」を表現しています。

楽譜はChrysander版を使用していますが、歌詞の「Incorruptible」の割付けかたはヘンデルのオリジナルでなく、改変されて歌われているものを採用しています。

今回はVOCALOIDのKAITOをバス独唱、DTMオケ音源にてトランペット独奏および伴奏を再現しています。

すべてPC上で構築されたもので生楽器等は入っておりません。

ポカロ&DTMによるヘンデル。バス独唱とトランペット独奏をお楽しみ下さい。

21. 合唱（終曲）「屠られし羊こそ〜アーメン」

オラトリオ「メサイア」より：ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル

Oratorio "Messiah": 53 Chorus "Worthy is the Lamb"- "Amen"

trionaP: 既成作 (nm10338575)

(a) Worthy is the Lamb that was slain,

and hath redeemed us to God by His blood

to receive power, and riches, and wisdom, and strength,

and honour, and glory, and blessing.

Blessing and honour, glory and power, be unto Him

that sitteth upon the throne and unto the Lamb,

for ever and ever.

屠られし羊こそ〜

自らの血をもって我らを贖いたもうた神の仔羊こそ

力、富、知恵、威力、

名誉、栄光、そして讃美を受けるにふさわしい。

讃美、名誉、栄光、そして権力が、

玉座にいます主と仔羊に有りますように

限りなく、絶え間なく。

(b) Amen.

アーメン

合唱：(a)巡音ルカ(S.A.T.B), 初音ミク(S.A), 氷山キヨテル(T.B)

(b)巡音ルカ(S.A), 初音ミク(S.A), 氷山キヨテル(T.B), 鏡音レン(T.B), KAITO(T.B)

音律：ラモー中全音律(D基準)/ピッチ：カンマートーン (A415)

編成：オーボエⅠ, Ⅱ/ヴァイオリンⅠ, Ⅱ/ヴィオラ/トランペットⅠ, Ⅱ/ティンパニ/

通奏低音 [チェロ/ファゴット/ヴィオローネ/ポジティブオルガン/チェンバロ]

引き続きヘンデルのオラトリオ『メサイア』より、終曲にあたる大規模なコーラスでアルバムを締めくくります。力強い合唱とトランペットによって「神の仔羊」イエスを讃える「屠られし羊こそ」と、荘重な合唱フーガで展開される「アーメン」の2部立てになっています。続けてお聴き下さい。

ここまで長らくご静聴ありがとうございました。何か心に残るものを感じていただけましたら、これに勝る喜びはありません。